

HOPE

ブルゴーニュ
ゆかりの人々

コレット Sidonie Gabrielle Colette 森と土の匂い、パリの頹廃、男と女

ブルゴーニュを愛した作家たち(1)

島野 盛郎

しまの・もりお

1932年生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。54年、ダイヤモンド社入社。雑誌記者、出版局デスク等を勤め、現在、フリーライター、「伝記研究会」幹事。主な著書に『夢の中に君がいる―越路吹雪物語』(白水社)、『食を創造した男たち』(ダイヤモンド社)、などがある。

ブルゴーニュ出身の作家たちの、横溢する感受性と強烈な個性の源には、深く豊かな自然への尽きせぬ愛着がある。

『ジャン・クリストフ』などでノーベル文学賞を得たロマン・ロラン、映画にもなった『青い麦』で日本人にも馴染み深いコレット、19世紀初頭のロマン派詩人、ラ・マルチーヌ……。ブルゴーニュに生まれ育ち、あるいは長期逗留し、そして終の住み処として、ブルゴーニュを愛し、ロマンを育んだ作家たちの足跡を辿ってみよう。

第1回は、今世紀前半の女流作家で、田舎の土の匂いをもちながら、パリの頹廃と男女の愛欲の機微をみずみずしいタッチで描き続けたコレットを紹介する。



▲コレットが生涯こよなく愛した生家
(ヨンヌ県サン=ソヴール=アン=ピユイゼ)

森を駆け回った少女

シドニー・ガブリエル・コレット (Sidonie Gabrielle Colette) は、1873年、パリの南東約180キロのブルゴーニュ地方の St. Sauveur-en-puisaye という小さな町に生まれた。ワインで名高いブルゴーニュであるが、この町をとりまくのは、ぶどう畑でなく美しい森であった。明るい灌木林もあれば、巨木のそびえる森もある。清い泉がわき出している池、草っ原もある。少女時代のコレットはこの森を駆け回って過ごした。のちに自然の

美しさに対する感受性、動植物への鋭い観察眼は並ぶものがないといわれた才能は、この環境で培われたものである。後年、パリに暮らすようになってからも、故郷や自然への愛着は消えることがなかった。処女作『学校のクロディーヌ』(27歳)の冒頭で故郷を次のように描写している。

「親愛なる森よ!わたしはそれらの森という森をことごとく知っている。実際よく歩き回ったものどもの。灌木林があって、そこをあなたが通ると小枝があなたの顔に意地悪くはねかえってきたりする。灌木林には太陽の光線がいっぱいさしこみ、苺や鈴蘭がところ狭しと賑わっている。それにまた蛇もよく見かける。あのなめらかで冷たい、見るも怖ろしい小さな身体がわたしの足もとをすべるように匍つてゆくのをみると、わたしは息のつまるような恐怖に身も震える思いだった(中略)。それに樅の林だ!それは鬱蒼としてもいなければ、神秘的でもないが、その匂い、下に向かって生い茂るバラ色やスマシ色のヒース、それに風に吹かれてたてる歌の調べのようなざわめき、そうしたもののゆえにわたしはその林を愛する。

そこへ辿りつく前にぎっしり重なった大樹林を通らなければならぬのだが、突然、豁然としてある池のふちに抜け出られて、なんとも言えないすばらしい驚きを感じる

のだ。その池は水面がなめらかで底深く、周囲をすべて森で囲まれていて、なんと地上のいっさいのものから遠ざかっていることだろう！その池の真中に縦の木々が島の形で生い茂っている。池を渡るには兩岸にかけてある根こそぎ抜かれた一本の幹の上を馬で勇敢に渡らなければならない。

縦の木の下でよく火を起こす。夏でさえそうするのだ。それもただそうすることが禁じられているからにはほかならない。そこでリングでござい、梨でござい、畠から盗んできたジャガイモでござい、

それから何も無いときには黒パンだとかとにかくなんでもかまわず焼くのだ。すると苦い煙と樹脂が匂ってきて胸が苦くなるような思いがするが、それはまた同時になんとも言えない快い気持なのだ。

わたしはこれらの森で10年間、夢中になってほっつき歩いたり、征服や発見を試みたりして生きてきた。そんなわけだから、いよいよそこを離れなければならない日がきたら、わたしは堪えがたい悲しみにおそわれることだろう……」（川口博訳、二見書房刊『コレット著作集I』より）

スキャンダル、そして名声

コレットは深く故郷を愛していたのだが、別れは17歳になったとき、突然やってきた。父親の財産管理の失敗のために一家は破産し、生家は競売に出されてしまった。コレットは泣く泣く故郷から追放されたのである。

20歳でジャーナリストのウイリー（本名アンドレ・ゴーチェ・ヴァイラル）と結婚、パリに出る。ウイリーは好色でけちな男であったが、コレットに小説を書くように勧めた。1900年、『学校のクロディーヌ』を夫の名前で発表、好評を得た。その後、クロディーヌものをいくつも発表した。結婚生活はうまくゆかず、1906年に離婚した。そこで生活のため、コレットはミュージックホールの踊り子となり、旅興行にも参加した。1910年、『ル・マタン』紙の文芸記者となる。2年後、編集長のアンリ・ド・ジュヴネルと再婚、第一次世界大戦中は報道記者として活躍した。

コレットの作家生活は第一次大戦後に本格的なものとなる。年上の娼婦と美少年の愛欲を描いた『シェリ』（1920）は文壇の注目を浴び、アンドレ・ジイドの絶賛を受ける。また少年と少女の微妙な性の芽ばえを扱った『青い麦』



▲1953年5月

（1923）、『シェリの最後』（1926）、『夜明け』（1928）、『第二の女』（1929）、『牝猫』（1933）などを発表、女流作家の地位を不動のものとした。

だが、2度目の結婚もうまくゆかず、12年後に離婚した（51歳）。その後、小説を発表するかたわら、舞台女優としても活躍する。出世作の『シド』を戯曲化し、主演女優として各地を巡演、人気を集めた。1925年、若きビジネスマンで、のちにジャーナリストに転じたモーリス・グードケと出会い、恋をする。61歳で3度目の結婚、二人は彼女が

死ぬまで別れることはなかった。

第二次大戦中も戦後も、若々しい好奇心と勇気を失わず、パリのパレ・ロワイヤルのアパートマンで『私の窓から』（1942）、『宵の明星』（1946）、『青い灯』（1949）などの傑作を発表した。コレットの小説の主なテーマは男女の微妙な愛憎のドラマである。最後まで感覚的なタッチでみずみずしく描くことができたのは、故郷の自然への尽きせぬ愛着のせいであろうと言われている。

1954年8月3日の夜、老衰のため、パレ・ロワイヤルの自宅のベッドで死去。81歳であった。死のニュースが伝わって2時間後には1万人ものパリ市民が、彼女に別れを告げるためパレ・ロワイヤル広場に列をつくった。8月8日、国民葬が同広場で盛大にとり行われた。墓地はパリのペール・ラシェーズ。墓碑名には（ここにコレット休む。1873-1954）とだけ書かれている。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらしゃいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせは（株）佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ

TEL:03-5762-3010 担当:岩沢、村山

